



地人館
E-books 21

デモ版 pdf

ことばの社会・文化を
とらえるエッセイ集

ことば・フランス・ヨーロッパ

泉邦寿 著



はしがき

この本は長らく「ことば」とその周辺のことを考えてきた筆者が、研究の途中で足を止め、いくつかの問題、話題をとりあげて、分かりやすく説明するつもりで書いた文章を集めたものである。

取り上げた話題はいろいろなところに広がっているが、中心となるのはやはり「ことば」である。私は「ことば」を考えるのに、記号としての言語だけではなく、それがおかれた具体的な場、社会・文化的な場やそれを使う人間との関係でとらえることを心がけてきた。本書にも、そうした傾向が色濃く出ているかと思う。

「ことば」はもちろん、人間が持ち得た非常に優れた記号のシステムではあるが、それだけで独立して機能しているわけではない。それを使用する具体的な人間がいて、それが使用される具体的な場として社会的、文化的なコンテクストが必ず存在し、そこからの言語への働きかけ、そしてその逆の働きかけが常に見られるのである。そのような視点から、主としてフランス語と日本語を眺めて、ことばと社会、ことばと文化について考えてみたいといつも思ってきた。また、日本における総合的な地域研究としてのフランス研究やヨーロッパ研究のあり方についても関心

をもってきた。

ここに載せた文章は、そのような関心から、時に応じて書かれたものである。それが書かれてからだいぶ時間が流れたので、内容的には古くなっているところもかなりあるが、根本のところは大きく変わってはいないと思う。

筆者としては、外国語を学んで「ことば」は面白いなと思うようになった方だけでなく、どうも外国語は難しいし、面倒だし、面白くない、得意でないと感じてきた方々に読んでいただきたいと思っている。そして、「へー、外国語のことを知り、考えることはけっこう興味深いんだな」と、感じるきっかけとなり、さらには、そのことばが使われている地域と文化への関心を高めてもらえたら、と願っている。

2022年3月14日 著者しるす

【ことば・フランス・ヨーロッパ】もくじ

はしがき

I フランスとフランス語

ことばの「意味」をめぐって——フランス語と日本語——
フランスの言語と社会をめぐって

新しいフランス研究をめざして

日本社会におけるフランス語

フランス語の野帳

ことばの難しさ・面白さ——研究余滴——

II ヨーロッパ

今、なぜヨーロッパ研究か

ことばから見た欧州統合

ヨーロッパの言語と言語政策

Ⅲ ことば

言語研究のすすめ

ことばを支える「人間くささ」について―助数詞を中心に―
外国語学習について思うこと

Ⅳ 人・本・随想

ビルマン先生のことども

スズランの咲く頃

ソダッタラ……

メランベルジェさんを偲んで

人間学としての言語学―鈴木孝夫『ことばの人間学』解説―

風とwind

芹沢カレンダーに思う

モンブラン山麓を歩く

エクス・アン・プロヴァンス―都市の古地図シリーズ―

南フランス（プロヴァンス地方）のクリスマス
世代を超えて共有できるものは何？

あとがき

電子書籍版へのあとがき

扉写真 フランス・アルザス地方の古い町並み。正面はワインの試飲サロン。通りにもワイン店の看板が見える。

I
フランスとフランス語

フランス語の野帳

生態学や文化人類学では実際の場合（フィールド）で観察し、見聞きしたことをすぐノートに記録し、あとで整理をして考えるのですが、それを野帳（フィールドノート）と称しています。ことの研究においても言語地理学や方言学では同じようなことをしますが、ここではその野帳に書くつもりで、私たちがいろいろなところで出会うフランス語に目を向けて観察し、考えていきたいと思っています。日本語とも比べてみたいと思いますし、フィールドもフランスとは限りません。

一 店の名から

今は日本の町を歩いていてもあちこちでフランス語が目にとまります。お菓子屋、レストラン、喫茶店（これ自体カフェといってますね）、雑貨店、洋服店（これもブティックといっていますね）などの名に多く見られます。おまけに、お店に *pâtisserie, boulangerie, restaurant, café, boutique* などとも書かれています。これ自体フランスの文化が日本のどういうところに多く入り込んでいるかを示してもいて興味深いのですが、ここではここのことに絞ります。

フランスの町を歩いていて、カフェやレストランの名前を見るといろいろあるのはもちろんですが、ことばの形としてはいくつかの形式があることに気づきます。まず多いのが、定冠詞つきの名でしょう。カフェの名には男性形が多いのです。パリのリュクサンブール公園のそばにはカフェがたくさんありますが、公園のすぐそばに Le Rostand という店があります。なかなかしゃれた店ですが、Rostand はおそらく戯曲シラノ・ド・ベルジュラックを書いた Edmond Rostand からもらったのではないかと想像しています。さらにその近くには、Le Luxembourg というカフェもあります。この名は公園名 Le jardin du Luxembourg からきていることは間違いありません。このように地名をつけるところも多く、以前は公園前の大きな通り rue Soufflot の角に由緒あるカフェ Le Soufflot がありました。もう大分前にマクドナルドになってしまいました。この Soufflot も元来は人名なのですが。

このようなカフェの名の Le はなにかというと、le café の le だろうと考えられています。そこで、おもしろいことに無理やり男性形にしている例もあります。フランス西部の港町 La Rochelle に行ったときのことです。まず、この町には定冠詞が付いていることに注目してください。こういう町はこだけではありません。ほかに、北には Le Havre、南には La Ciotat といった名の町がありますし、フランス以外なら、La Haye (オランダのデン・ハーグ)、Le Caire (エジプトのカイロ) もあります。ところで、La Rochelle には Le Rochel というカフェがあったのです。もちろん町の名から来ているわけですが、La Rochelle という女性形のままは使わずに、

男性形の定冠詞 *Le* をつけただけでなく、*Rochelle* も文法的な規則にしたがって *Rochel* という形に変えているところがみそです。

とはいっても、いつも *Le* にしなくてはならないのかと思うとそうでもありません。日本にも店を出している *Les Deux Magots* のような店がありますし、*La Coupole* とか、*La Rotonde*、*La Palette* といった店もあります。これらは普通名詞を店名として固有名詞化しているので、もとの文法的な性まで変えることはしたくてもできませんね。先の *Le Rochel* などはいまういった特別な例だと言えます。

パリの有名な *Lipp* などはアルザス出身の創設者名をそのまま無冠詞の形で使っていますし、*ソルボンヌ* のそばには *Batard* という店もあります。これらはカフェではなくブラスリですが、この形はカフェではどちらかというと少数派のようです。

日本語という言語には冠詞がないので、フランス語を使ってももとの冠詞は消されてしまう傾向があります。最近、家の近くにできたカフェ・レストランの名は *プチ・フラン* というのですが、これも同様です。看板は横文字なので、そこは *Le Petit Blanc* の方がいいのでは、とも思っているのですが、よけいなお世話でしょうね。川の名前でも *La Seine*、*Le Rhône* などが、日本語になると、それぞれ *セーヌ川*、*ローヌ川* となって冠詞が落ちるのを見れば、この一般的な傾向がわかりますね。

逆に、フランス語では「川」にあたる部分がありません。日本語とちがって、川の名を「*e*

Fluve de la Seine とか、La Rivière de la Saône とかといったようにはしないのですが、カフェにはあります。たとえば、Café de Flore, Café de l'Alma, Café de la Paix, Café Ruc といった名がそれです。

もちろん、店の名にはやはりすたれがあります。かつては au (x) とか a la といった前置詞 a をつけた形が多くあり、これはレストランにはまだたくさん見られます。Au Beaujolais, Au Quai d'Orsay, Aux Moutons de Panurge とつた店がありますし、東京にも Aux Bacchanales とつた店が出ています。カフェにも Aux Lys d'Argent のようなところがありますが、現在はそう多くありません。この形はだいたい古い時代からの形なのですが、かつてはデパートにも使われていました。フランスで一番古いデパートは、エッフェル塔で有名なギユスターヴ・エッフェルが建てた鉄骨の老舗デパートで、以前は Au Bon Marché といっていました。しかし、その名はいつのまにか Le Bon Marché に変わってしまいました。この方が今風だからなのでしょうか。

町を歩いて、店の名を見ながらその変遷を日仏語で比較してみるのも、新しい発見への入り口になります。

『ちらんす』白水社、二〇〇六年四月号



大きな新しい表示には Le Bon Marché（写真上）とあるが、昔の建物には Au Bon Marché（下）の表示も残っている。

二 メニュー (一)

カフェやレストランに入るとまず見るのが、メニューでしょう。このメニューということばがフランス語であることは知っていますね。日本語には英語を経由して入ってきたものと考えられますが、フランス語の意味と違っているところがあるので、注意を要します。

まず、どのような食べ物が用意されているかという、ある種、抽象的な「献立」という意味、これはフランス語でも同じです。しかし、日本語では具体的なものを指す「献立表」の意味でも使います。「メニューを持ってきてください」というのがそれですが、これには *le menu* という語は使えません。この場合は、献立が書いてあるものを指す *la carte* を使わなくてはなりません。だから、右の日本語は、“*La carte, s'il vous plaît.*”とつい、これを“*Le menu, s'il vous plaît.*”と叫びたら「定食をお願いします」という意味になってしまうのです。そう、フランス語の *menu* には定食という意味もあるのです。これはフランス語では「映画」を指すのに *le cinéma* と *le film*、芝居を指すのに *le théâtre* と *la pièce* という二つの形を使うのと似ているかもしれません。前者は抽象的な意味、後者はそれが実際に実現されたものです。

J'adore le cinéma français. 「私はフランス映画が大好きだ」

J'ai vu un film français. 「私はフランス映画を見た」

それでは *carte* を開いて *menu* を見ることにしましょう。カフェやレストランによって書き方は異なる面もありますが、日本と違って、料理の仕方による分け方はなされていないのがふつう

です。つまり、「焼き物」「煮物」「揚げ物」というようなカテゴリー分けはあまりなされません。もちろん、焼き物にあたる *les grillades* ということばもありますが、これがメニューに書いてあるときは、網焼きの肉か魚（多くは肉）ですが、日本の懷石などのようなコースの一つとは考えられません。フランス語ではふつう、素材による分け方が第一です。

では、あるレストラン (*La Tournelle Restaurant*) のメニューのカテゴリー分けを見ることにしましょう。

一番上に *Menu à la carte* とあり、その後 *Hors-d'oeuvre / Poissons-crustacés / Viandes & grillades / Légumes / Le plateau de fromages / Desserts / Glaces* といったカテゴリー分けがなされ、その下に、いろいろな食べ物がかかれていきます。もちろん、こんな風にカテゴリーに分けることはせず、すぐに一品一品の名を書いていくところも多いのですが、カテゴリー名はなくとも、なんとなくこのようなグループ分け方がなされている感じがします。

Hors-d'oeuvre は日本語にも入って、「オードブル」といいますが、前菜のことですね。日本語のアクセントは頭高でオーのところが高く、最後はつめてダブルのように発音しますが、これは「オールドウーヴル」と言ってください。oeuvre は作品や業績という意味で、料理では主菜のことと考えられるので、要するにメインに入らないものなのですね。だから、省略して、これを食べないことも可能です。

では、その *Hors-d'oeuvre* にはどんなものが書いてあるでしょうか。たとえば、*Bisque de*

Homard「オマール海老のビスク(オマール海老をすりつぶして作る濃厚なポターージュ)」、Oeufs de saumon「イクラ」、Champignons à la Grecque「ギリシア風キノコ」、Escargots de Bourgogne la dz「ブルゴーニュ産エスカルゴ二個」、Terrine de Canard fine champagne「シャンパーニュ風味鴨のテリーヌ」などあります。よだれが垂れそうになりますが、料理の中身よりもここではことばを見なくてはなりません。

まず、無冠詞ですね。カテゴリー名も一つを除いて無冠詞でした。多くがこのスタイルですが、レストランによっては定冠詞をつけたところもあります。それから、à + 形容詞という形式が見られますね。これはメイン料理でも見るのですが、土地の料理のやり方にちなんで名をつける時によく出てくる形です。ここではà la Grecqueですが、à la Milanaise「ミラン風」、à la Provençale「プロヴァンス風」、à l'Américaine「アメリカ風」のちがいのび、à la manière grecque, milanaise のような形がもともと考えられます。

もう一つ、エスカルゴのところでは二個をla dzと書いてあるのは、当然la douzaine(ダース)です。この類の定冠詞は10 euros le kilo「キロ一〇ユーロ」とか、2 euros la pièce「一個二ユーロ」などのように、市場で見かけるのと同じです。要するに、キロあたりとか、一個あたりとかいう、日本語の表現に相当するわけです。

次は Poissons-crustacés のところを見ましょう。crustacés というのは甲殻類のこと、エビ・カニの類のことです。なまはち、1/2 Languste froide mayonnaise「1/2伊勢エビの冷製



パリのある大衆レストランの中 座るとメニュー (la carte) をもってくる。

マヨネーズ添え」とか、Sole Meunière「シ
タビラメのムニエル」とかがありますが、
不思議なものも見つかります。Cuisse de
grenouille Provençale「カエルのもも肉プ
ロヴァンス風」というのがそれです。フ
ランス料理にはカエルがあるのは知って
いましたが（だからイギリス人はフラン
ス人のことをからかった言い方で、Frog
Eaterといいます。これは自分たちが食べ
ないからにすぎませんが）、しかし、これ
が Poissons-crustacés の類に入っていると
は驚きますね。たしかにカエルは水の中に
いますけれど…

どうしても食べ物の話になると長くなり
ます。続きはまた来月にしましょう。

『からんす』白水社、二〇〇六年五月号

三 メニュー (11)

前回、レストランのメニューではカエルのもも肉が Poissons-crustacés のところに入っていると書きました。パリの七区、rue Cler の魚屋をのぞくと、ありました。なんと、カエルのももがその先の足とともに、二つセット(要するに、両足ということですね)にして箱にぎっしり詰められて店頭にならんでいるではありませんか。やはり魚屋で売っていますね。

皮が剥かれてずらりと並んでいると、はじめはなんだかわかりません。でも、商品名に Cuisse de grenouille と書いてあるので、はっとして見ると確かに、カエルの足なのです。いっぱい入っていたはずの箱からはだいぶなくなっていましたので、買う人がいるのですね。友人に聞けば、家庭ではあまり食べないそうなので、そんなに売れるとは思いませんが、ちゃんと魚屋で売っているところを見ると、家庭ではどういう料理を作るのかと興味をもちます。残念なことに、私の知り合いには家でこれを食べる人がいないのでわからないままです。

その後、アルザスのリクヴィールで街を歩いていると、“La Grenouille”という名のレストランがあり、看板が出ていましたので、これも写真を撮りました。

ただし、カエル料理専門店ということではありませんので、念のため。

さて、定食を le menu というのだと前回書きましたが、これより簡単なものは、la formule と呼んでいます。前菜とメインとデザートという組み合わせで、menu とどこが違うのかと思いますが、formule は、前菜+メイン+デザートのとどちらかの組から選ぶことになっている



魚屋で売られているカエルの足 皮が剥かれて並んでいるので、よく見ないと分からない。



レストラン「La Grenouille (カエル亭)」の看板

とか、ムール・マリニエール Moule (à la) marinière 「ムール貝の白ワイン蒸し煮」とフライド・ポテト Frites と生ビールのように、menu よりも簡単なものをいうようです。もともとは決まった形式の文とか決まり文句、定式などを指すことばだったのですが、いつの間にか「定」食の意味でも使われるようになったもので、古くから使われていたものではありません。現代人の忙しい生活スタイルとともに出てきたことばといえるでしょう。

日替わりの一品料理は plat du jour といっています。これはカフェやレストランの小型の黒板に書かれ、毎日変わっていきますので、今日の plat du jour は何かと尋ねる必要がありますが、多くの場合、それも書いてあります。

メニューに戻りましょう（本題に戻ることを「Revenons à nos moutons.」といえます）。

Poissons-crustacés に続くのは Viandes et grillades です。これは肉料理ですが、grillades と書いてあるのは網焼きのことで、その点、日本の「焼きもの」より狭い意味になります。Filet de boeuf grillé 「牛ヒレ肉の網焼き」、Steak grillé aux herbes de Provence 「プロヴァンス・ハーブ香味網焼きステーキ」などのほかに、Côtes d'agneau haricots verts 「子羊の脇腹肉さやインゲン添え」、Rognons de veau flambé 「仔牛腎臓のフランベ」などもありますが、ここには grille(s) と書いてないので、網焼きではないわけで、フライパンやオーヴンを使って焼いたものになります。日本語の「焼く」という動詞はフランス語では cuire, rôti, griller などいろいろになり得るのですが、griller とこのことばがメニューでは言語的にマークされて出てくることを知っておく

必要があります。つまり、「網焼き」だけはちゃんと grille と書かれるということです。

それともう一つ、これらの料理名の中で rognons と côtes には s がついていきますね。これはもちろん複数を表しているわけで、rognon も côte も複数出てくること（まあ、二枚でしょうね）を理解しなくてはなりません。ちなみに、steak も filet も単数ですね。こういう初級文法で習うこともメニューを読むときにちゃんと応用でき、それによって出てくる料理の姿の一部が想像できるので、重要ですね。

その次には Légumes、それから Le plateau de fromages という項になりますが、légumes にも fromages にも s がついていきますね。ですから、ここでも種類がいろいろ出てくると考えていいということだと思います。フランスでは食事の終わりにチーズを食べますが、そのときには、たとえば、camembert とか gruyère とか roquefort とかいうように、何種類かのチーズを食べるわけ、それが fromages という複数形の意味なのです。もちろんチーズを食べるという時には、*Je mange du fromage.* というふうに部分冠詞が出てきますが。

さて、いろいろな目で次の Desserts をご覧ください。Pêches flambées au whisky 「ウイスキー風味桃のフランベ」、Tarte aux fruits 「フルーツのタルト」、Mousse au chocolat 「チョコレート・ムース」、Cocktail de fruits au kirsch 「キルシュ風味フルーツ・カクテル」、などです。どうですか、もう数の姿が見えたでしょう。

七 ベルギーの町から（一）

〈フランス語の野帳〉もここでちよつと息を入れて、フランスの隣国ベルギーを訪ねてみることにしました。ベルギーの首都ブリュッセル Bruxelles には、パリからTGV国際列車 Le Thalys に乗って一時間半ぐらいで着きます。

車中のアナウンスは国際列車だけあって、フランス語、英語、そしてこれから向かう国の公用語の一つであるオランダ語です。パリまでの飛行機の中がフランス語、英語、日本語だったのは、乗っている客の多くが日本人なのに合わせているわけですが、それと同じ理屈ですし、英語はだれにでも通用し易いという意味で入れているのでしょう。しかし、後で見ると、ベルギーの国内列車になると英語はなくなっています。

ご存じのように、この国の公用語は三言語、フランス語、オランダ語、ドイツ語です。ベルギー語というのはありません。言語紛争をも含む長い歴史的経緯の結果、今は連邦制となった王国で、行政的な区分と、言語ならびに言語文化的な区分からなる重層的なめずらしい連邦制をとっています。なかでもブリュッセル首都圏は二言語併用地域として特異な地位を公的に保っているところですから。

さて、Bruxelles-Midi 駅に着き、タクシー乗り場に近づくと、駅に一番近いところに止まっていたタクシーがドアを開けたので、これは具合がいいとそれに乗し、出発しようと思いました。すると、他のタクシーの運転士がやってきて、すごい剣幕で文句を言いだし、私のタクシーの運転



ブリュッセルの中心グラン・プラス 市庁舎をはじめ中世の建物が並ぶ。

士と大変な言い争いとなりました。要するに横から客をとったような形になったので、そのことを非難している様子なのです。そのフランス語の聞きとりにくいこと。とりわけ、私の乗ったタクシーの運転士のことばかりづらい。この人はオランダ語を母語とするフラマン地域の出身者らしいのです。母語でないことばのせいか感情が先になり、分が悪いまま、それでも言い張ったあげく、猛スピードで出発したので、こちらは気が気ではありません。町のことや通りのこと、建物のことなどを尋ねて、運転士の気を静めるようにすることになりました。二言語地域とはいっても、町での実際のコミュニケーションでは圧倒的にフランス語が優位であることを実感したわけで



フランス語とオランダ語の二言語で表記された道路工事の表示

す。この運転士は、やり合っているときはフランス語なのですが、怒って独りで何か言っているときはオランダ語でした。まさに言語的ハンディを見せつけられる場面に遭遇してしまったわけです。タクシーから降りて、町の通りの名を見れば、すべて二言語で表記されているばかりか、道路工事の表示や注意書きもフランス語とオランダ語の二言語表記となっています。

たしかにこの町は二言語地域なのです。しかし、店や会社の表示のほとんどはフランス語だけです。もっとも、そこがブリュッセルの中でも大きな部分を占めるフランス語の地区だったからでもあります。

なかにオランダ語だけで会社の名前や



ブリュッセルの警官の背の文字は2言語。



オランダ語で書かれたトラックの表示

表示が書いてある車を見かけました。

住所と電話が書いてあり、町名はルーヴェン Leuven (フランス語ではルーヴァン Louvain) とあります。ルーヴェンはオランダ語圏なので、フランス語は一言も書いてないというわけなのです。ベルギーが属地性 territorialité に基づいた連邦国家であることをよく示しています。

このことは列車に乗ってフランス語圏の都市リエージュ Liège に向かうときもつとばかりとわかります。ブリュッセル駅を出るときには、駅でも車内のアナウンスもフランス語とオランダ語の二言語ですし、車内の電光板にも〈Train pour Eupen〉〈Train naar Eupen〉と二言語で出てきます。しかし、出発してしばらくすると、表示もアナウンスも(明らかに先ほどと同じ声の車掌ですが)オランダ語だけになってしまいます。というのも、ブリュッセルはオランダ語地域の中にある特別区域で、一歩出ればすぐオランダ語地域になるからです。ですから、オランダ語を知らない私のような者は急にならなくなってしまいます。Le Thalys の車中のような英語もありません(日本は親切ですね)。たとえば、ルーヴェンを出るときは、Deze trein spot in Luik-Guillemins. と表示されるのですが、Liège に行こうとしている私は、Liège の駅名が Liège-Guillemins であることを前もって知っていたのでなんとか推測できたものの、そうできなかったらさっぱり、ということになります。そして、いよいよリエージュに近づいてくるとフランス語圏に入るので、今度はアナウンスも電光表示も一切がフランス語だけで、〈Nous arrivons à Liège-Guillemins.〉になってしまっわけです。

この切り替えの見事さと徹底ぶりには舌を巻くと同時に、ルーヴェン大学まで二つに割って、オランダ語圏の大学とフランス語圏の大学に分けてしまったこの国の言語的対立を思い知ったのでした。

『ふらんす』白水社、二〇〇六年一〇月号

あとがき

私が上智大学の教壇に立つようになってはや四十余年、「光陰矢のごとし」とか、*Tempus fugit*とか言われてきたことが、まことに実感できる。

私が通っていた暁星小学校のクラスメイトであった品田昌泰君の御尊父が上智大学経済学部の教授をしていて、その住まいが当時の国会図書館（今の迎賓館）の一角にあったことから、この四谷にはよく遊びにきた。国会図書館構内には椎の大木がかなりあって、秋には実がたくさん落ちるので、それを拾って彼の家で煎ってもらって食べたことをよく覚えている。四谷近辺はまだそんなのどかな風景を残していたが、進駐軍のかまぼこ兵舎を利用した教室の残る上智構内にも文字通り遊びにきたのである。高校生になると、これまた彼に案内してもらって、今は取り壊されてなくなった上智会館の中の聖三木図書館に時々くるようになった。こぢんまりとして、町の図書館よりアットホームで落ち着いた雰囲気が入って、本を借りるだけでなく、受験勉強もしていた。

その後、私が大学で最初に入ったのが、工学部の化学だったので、ドイツ語が必修でやらなくてはならず、それならと、上智でそのころ開かれていたドイツ語の夏季講習に通い、戸川先生や

横川先生に習ったのだから、考えてみると上智とのつきあいは半世紀以上にも及ぶものなのである。

このたび、上智を退職するにあたって、フランス語学科から最終講義をするようにとの要請を受けたので、これを機会に、主として学内の出版物に書いてきた文章を中心に拾い上げてまとめおきたいと考え、作ったのがこの冊子である。あまりに専門的な匂いのするものは極力避け、他のところに書いたものも適宜合わせて一本にすることとし、内容的に重複するものは避けることにしたが、それでも部分的に重なってしまうところが残ってしまった。また、古いものを引っ張り出しているので、現在の時点では違っていること（たとえば、EUの加盟国数や公用語数など）もあるが、そうした点についてはご寛恕をいただきたいと思う。また、ふつうこうした印刷物にはつきものの年譜や著書論文一覧も作ってはみたが、頁もとること故、割愛し、奥付に簡単なものを付けるにとどめた。

私のやってきたことは広い意味での言語研究だが、出発はフランス語であり、意味の研究（意味論）である。そのうち、だんだんと日本語のことも視野に入るようになり、両語の比較対照を通じてことば一般のことも考えるようになった。それと同時に、自分の教えているフランス語というものの社会・文化的な位置が気になって社会言語学的な関心を持つようになり、フランス国内の地域語やフランスとヨーロッパの言語政策、それと共に欧州統合という経済政治社会の大きな変化の中での言語問題にも研究が広がっていった。そのような中で、複数言語の共存する状況

とそこでのコミュニケーションのあり方が面白くなり、ヨーロッパだけでなく、最近では東南アジア、中東、アフリカにも出かけている。そのおかげで若い頃から親しんできたフランスやフランス語を広い世界の中において考えられるようになった。また、意味論の方では、言語的な情報とそれ以外の情報（たとえば、絵画、彫刻からいろいろな表示まで）の意味関係にも興味がわき、作品タイトルやさまざまなネーミングの問題など、ますますその範囲が広がってきている。

こうして自分の歩んできた道を振りかえると、長らく教壇に立ってまがりなりにも教育と研究を続けてこられたことについて、まことに多くの方々のご厚情とご支援の賜物とつくづく感じ、感謝の気持ちでいっぱいである。とりわけ、どこの馬の骨かも分からぬ若者を引っぱり出してくださったクロード・ロベルジュ先生、上智で教壇に立つということがどういふことであるかを教えてくださった岳野慶作先生とポール・リーチ先生、また、ことばを研究することの面白さと奥深さを教えてくださった慶應義塾大学の鈴木孝夫先生と松原秀一先生、ことばの研究に進もうとする私の背を押してくださった佐藤朔先生には心からのお礼を申し上げたい。そして、長年の同僚、友人、学生諸君に対して、多くの感謝をささげたいと思っている。そのもろもろの感謝のしるしとして、このささやかな本を皆さんにお贈りしたいと思う。

以前、この類の本を古書業界では商品価値のない「饅頭本」（葬式饅頭からきている）というのだと松原先生から教わったことがあるが、まあ、饅頭もお茶うけにはなるから、そのことを考えて、よしとしたいと思う。ただ、まずくて喰えたものではないということにならないか、その

ことが気がかりなのではあるが……

二〇二一年二月 上智大学二号館七階の研究室にて
泉 邦寿

電子書籍版へのあとがき

この電子版『ことば フランス ヨーロッパ』は2011年3月10日に私家本として発行された同名の書籍を電子版としたものである。

書籍版は、そのあとがきにも記したように、もともと私の退職にあたり、それまで上智大学の学内で書いてきた文章（論文を除く）と学外で書いたものから選んで、まとめて一本にしておきたいという思いと、これまでお世話になった方々と最終講義にきてくださった方々へ、感謝の気持ちを込めてお贈りしたいという思いから、出版したものであった。

幸い、面白かったと言ってくださる方もいて、さらにはどうして一般書籍として出版しないのですか、と言われることもあったので、機会があればそうしたいと思っていたところ、このたび地人館の計らいで電子版での出版がかなうことになった。まことにありがたいことである。

書籍版発行の日付は2011年3月10日だが、その翌日に東日本大震災という大きな出来事があった。もう授業はない時期ではあったが、その日はちょうど大学に出ていて、研究室で訪ねてきた卒業生と話をしているとところだった。そこに大きな揺れがきた。ビルの7階にある研究室だから、その揺れは非常に大きく、しばらくは研究室内にいたが、やがて廊下に出た。しかし、ま

ともに立つてはいられない状態であった。まもなく揺れはおさまったが、エレベーターが動かないので、階段を降りて外に出た。多くの建物から人が出てきて、非難のためにグラウンドの方に移動して落ち着くのを待った。

電車が動かなくなっていたので、帰宅もできず、学科の共同研究室で20人ほどの学生達とともにテレビを見て、この震災と津波のすさまじさに唖然としたのであった。その晩は皆研究室に泊ったが、暖房も切れて、じんじんとした寒さが体にこたえた。そして、明るる日、なんとか自宅に帰ったのであった。

本来、その年の3月末にある予定だった最終講義は延期となり、翌2012年の2月に行ったので、その時、ようやく本を配布することができたのであった。だから、本は発行されてから約1年はそのまま動かず、翌年に皆の手に渡ったのである。あれからはや10年の時が流れたのだが、その間、今回の新型コロナウイルスの世界的な感染拡大を含め、さまざまなことがあった。そして、ロシアによるウクライナ侵攻である。最終講義に来て下さった、同僚で先輩のクロード・ロベルジュ先生も、恩師鈴木孝夫先生も亡くなってしまわれた。また、それより前には、お世話になった松原秀一先生も亡くなられた。

しかしながら、多くの卒業生が国内外のさまざまな分野で活躍している姿や報に接する機会も多く、そのたびに非常にうれしい気持ちで一杯になった。それも、ながらく教壇に立ち、学生達と共に学んでくることができたからで、真に教師冥利に尽きるという思いである。

電子化にあたっては、本来なら、現在の時点での新しい情報も入れ、その後に書いたものも加えて本書を一新しようかとも考えたが、内容的に、今でも変わらず通用する部分も多いので、今回は多少の字句の直しやデータの変更、写真の追加にとどめて、基本はほぼ元のままとすることにした。機会があれば、その後のことも含め、現在考えていることを新たにまとめてみたいと考えている。

このような形での出版を可能にしてください。くださった地人館の大角修さん、佐藤修久さんのお二人には心からのお礼を申し述べたい。また、初めの印刷本を作るにあたりお世話になったばかりか、PDFの形でも残しておいて下さった株式会社プリント・ボーイ（当時）の新田典基さんにも感謝の意を表したい。

2022年3月14日 泉 邦寿



泉邦寿 (いずみ くにひさ)

1942年千葉県市川市生まれ。暁星高校卒業後、千葉大学工学部から慶應義塾大学経済学部に移り、卒業。同大学大学院文学研究科仏文学専攻修士課程修了。エクス・マルセイユ大学（プロヴァンス大学）大学院言語学専攻博士課程にフランス政府給費留学生として留学。上智大学外国語学部講師、助教授、教授を務め、現在、上智大学名誉教授。その間、フランス語学科長、言語学副専攻主任、外国語学部長を歴任。外務省研修所、聖心女子大学、慶應義塾大学、神田外語大学、福岡大学、広島大学、熊本大学、東京大学、学習院大学、国際基督教大学、早稲田大学などでも教鞭をとり、フランス国立社会科学高等研究院（EHESS）客員教授を務めた。また、NHK ラジオフランス語講座（入門編）を担当した。専攻は、フランス語学、意味論、ヨーロッパ言語社会論。主な著書に、『フランス語を考える 20章－意味の世界－』（白水社）、『フランス語、意味の散策－日・仏表現の比較－』（大修館書店）、『フランス語の語彙と表現－一歩進んだ意味の世界－』（ハベルプレス）、『フランス語の小径－たのしい意味世界への誘い－』（白水社）、『グローバル化する世界と文化の多元性』（共編著、上智大学出版）、『現代フランス語法辞典』（共著、大修館書店）、『現代フランス類語辞典』（共著、大修館書店）、『白水社ラールス仏和辞典』（共著、白水社）、『フランス語学研究の現在』（共編著、白水社）などがある。

ことば・フランス・ヨーロッパ

いずみくにひさ
著者 泉邦寿

初版発行 2022年6月15日

ちじんかん
発行 地人館

〒116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル3階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7939

<http://chijinkan.com>